

21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑦

天理教リヨン布教所長
藤原 理人 Masato Fujiwara

前回「さづけ」について書いたが、天理教の救済観に関連して、気をつけなければならない言葉がある。「おたすけ」である。「たすけ」や「たすかり」は日本語の解釈では治癒とも救済とも受け止められうるが、フランス語は同じ単語ではない。治癒は guérison、救済は salut という訳語がふさわしいと思うが、仏和大辞典電子版では前者が「(病氣、精神的苦痛などの) 回復、治癒」で、後者は「安泰、救われる道、救済、救霊」とある。Salut は、不幸や危機から逃れるという意味もあるが、原罪や天罰からのたすかりも含め、より精神的な意味合いが強くなる。

天理教の「おたすけ」には、「つとめ」と「さづけ」という主に二つの救済手段がある。ともに魂の救済に寄与する行為だが、「さづけ」は病人を目の前にして行う祈りで、救済がその病人一人に向けられる。日々の「つとめ」はどこでも誰でも行うことができ、「さづけ」では願えない自分自身のたすかりから世界たすけまで、幅広く神の守護を願う祈りである。今回は、フランス布教の大きなポイントだと考えている「つとめ」について書きたい。救済から話を起こしたが、それとは関係のない展開になる事をあらかじめ断っておく。

外国における「つとめ」の課題は言うまでもなく歌と踊りであろう。言葉の意味も、動作の持つ意味合いも分からずに実践するのはかなり難しい。確かに日本語でおつとめを完璧につとめられる外国人はいる。しかし、日本の天理教信者で、十二下りのておどりをフランス語で歌って踊れるようにして下さい、と言われてどのぐらいの人が努力するだろうか。1 時間ほど続く歌詞を覚えるだけでも大変なのに、踊りまで一緒に覚えるのである。10 分ほどの座りづとめだけでも、フランス語で真剣に覚えようと努力する日本人はどれほどいるのだろうか。日本と同様先進国と言われるフランスで、おつとめは日本語で覚えなければならないと言われて奮起するフランス人はかなり少数だろう。フランスの人口は 7,000 万に届く勢いだが、おつとめをマスターした非日系フランス人が 10 年で数人出てくれば万々歳だと思う。教えに共感してもらっただけでも容易でないが、そこから更に日本語のおつとめをとれば針の穴を通すような難事になってしまう。

はたして教祖は日本語の「つとめ」にこだわったのだろうか。これはもはや答えのない問いである。結果論で言えば、日本で最初に広まったのだから日本語でつとめさせるつもりだったと考えるのが自然である。ただ、天理教は世界救済を前提とした陽気ぐらし世界の建設を信仰の目的としている。もし日本語でのおつとめにこだわるのであれば、宗教が衰退している現代の世相から考えると、世界たすけという目標はとても達成できないだろう。だが幸いにして、そうではない。韓国語のおつとめがあり、アメリカでも「歌って踊れるみかぐらうた」という英語バージョンのおつとめが作成されたと聞いている。音楽と踊りに合わせて歌詞を翻訳するのは気の遠くなる作業だと思うが、そこに費やされた時間と努力にただただ敬服するばかりである。

とはいえ、歌詞を翻訳しただけでは日本的な要素は残ってしまうだろう。服装は教服という和装ではない服でつとめているところもあると聞く。しかし、鳴物は日本の楽器であるし、節回しや舞踊そのものも日本的な要素が大いにあるだろう。つま

り、おつとめから日本的な部分をいっさい取り除けば、原型をとどめないほど別物に変容するに違いない。そう考えれば、言葉だけを翻訳して歌って踊れるようになっていても、自分たちのアイデンティティとは異質のものを実践しているというフラストレーションはいつまでも拭えないのかもしれない。

聖地「ぢば」では、おつとめの第一節から第三節までの「かぐらづとめ」と呼ばれる部分は、世界創造の証拠として据えられている「かんろだい」を囲んで面をつけて立っておどるが、それ以外の場所では同じ形式で「つとめ」を行う事は許されていない。これは神の言葉である「おさしづ」によって指示されたことであり、人為的になされたものではない。このように第三節までの「かぐらづとめ」に特別な意味合いがあるのならば、教祖に教えられた言葉と手ぶりをそのまま使う方がいいように思う。第二節は外国人には相当難しいが、高すぎる壁ではない。そうすると、日々家庭でつとめる祈りも実践しやすくなるだろう。そして、人類創造の元初まりを象った重要な部分の「つとめ」を教えられたままに行っている、あるいは翻訳という人間の解釈を介していない祈りを捧げているという感覚も生まれるのではないかと。

そして、「かぐらづとめ」と同様の指図がなかった第四節「よろづよ」と第五節十二下りのておどりに関しては、歌って踊れる翻訳、楽器の変更、節回しや調の変更などを含めて積極的に異文化変容を許容してみてもどうかだろうか。この部分が時間的に「つとめ」の大半を占めているので、外国人にとっても実践しやすくなるだろう。

座りづとめでは教祖が教えられた時代背景に想いを馳せ、立って踊る部分は自分たちのアイデンティティをおつとめに乗せて表現する。まさに教祖の世界と自分たちが生活する世界とが一体化するような、時間と空間を超越する「つとめ」にならないだろうか。

もちろん易きに流れることは良くないという考えもあるだろう。しかし、日本語の「つとめ」はあまりに困難過ぎる。そこから積極的に一歩踏み出す動きが起きなければ、世界たすけは絵に描いた餅で終わりかねない。

別の観点からも重要なポイントがある。フランスでもストレスに苦しむ人は多いという。既述したように、不安定な精神状態に付け入るカルト集団も消滅していない。他人の救済以前に自身の心の安寧を願う人は少なくないだろう。「つとめ」は、それらの人にとっても、遍在する神の恩恵をもっと身近に感じさせてくれる憩いの瞬間ではないだろうか。人間の体の中で神自身が身体機能として働いているという十全の守護の教えは、神と人間の間に厳然とした隔りがあるフランスでは重要な意味合いを持つだろう。そのような土地で天理教信仰を身につけるためには、十全の守護と「つとめ」の関連性を理解して、人体に宿る聖なる力を自ら感じ取れるかどうか、他の何よりも大事な課題となろう。近隣に天理教コミュニティがほとんどない環境下で「つとめ」の実践を諦めてしまったら、天理教の本質をつかむ唯一の術を失ってしまうとさえ思えるのだ。

以上の理由から「つとめ」の実践が天理教フランス布教の生命線になると考えるのである。